

ロールシャツハ・テストからみた母子相互作用*

—ある夜尿児の症例研究—

井原成男**

はじめに

われわれの行動が環境に対するイメージによって規定されていることは衆知の事実である。例えばエクスキュール (Uexküll)²⁾は、蜜蜂が花畑を見た場合どのように見えるかを描いている (Fig. 1)

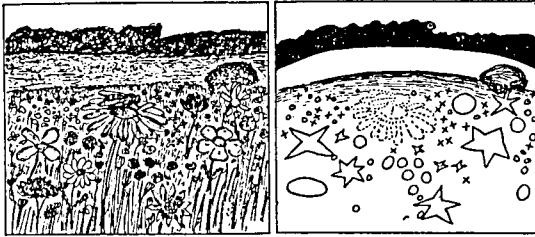


Fig. 1 蜜蜂の環境世界

(左図が人間のみた花畑、右図が蜜蜂のみた花畑である)

が³⁾、この図を見れば蜜蜂は決して人間のように美しい花畑 (左図) を見ているのではなく、生存していくために必要な蜜を吸うという目的になかった形態 (右図に示されている星やXの形態) のみにひかれていくという様子がよく分かる³⁾。蜜蜂のなげない行動も、蜜蜂が世界をどのようにイメージしているかを知ることができればより深く理解することが可能であろう。

藤岡⁴⁾は比較行動学の立場からイメージについて次のようにのべている。

……私たちは各自の抱くイメージを情報の形に変換する。他者は自分なりに情報としてそれを受け取り、これにもとづいてイメージを抱く。両者のイメージにかなりの共通部分があれば、実際問題として了解が成立したということになる。行動のみならず、了解ということはもともとイメージの世界から成立してくることである。言語のような情報によらない、身振りのような情報による了解も、日常生活の中ではいつもある……

* 本稿の一部は日本心理学会第45回大会において発表された。¹⁾

** 早稲田大学 (長野大学産業社会学部)

ここにのべられていることは、われわれがお互いを了解する場合、そこにはイメージの了解が成立しており、それは必ずしも言語などによらなくても可能であるということである。日常生活におけるお互いの了解には特にこのイメージの占める割合が大であると思われる。何故なら、日常生活は知性よりも感情的側面によって成立している場合が多いからである。

心理臨床的立場からみれば、このことはとりわけ重要である。心理臨床的な場面での相互理解には感情的理解が知的理解より重要であると考えられるが、そのような観点からみれば、感情過程を支えるイメージのもつ役割の占めるウェイトが大になるからである。水島ら⁵⁾は「イメージは感情の象徴過程となりやすく」、「感情過程の媒介として極めてユニークなもの」であるとのべて、感情過程をになうものとしてのイメージの役割を強調している。

さらに、相互交渉をもつ2者間の一方が子どもである場合、イメージのもつ役割はさらに大きくなると思われる。例えば母子間の相互交渉を例にとってみると、この2者関係は極めてユニークな人間関係である⁶⁾⁷⁾。それは一方が大人であり一方が子どもであるという以上の意味を持っている。そこには2者間に絶対的な能力差があるということだけではなく、2者間に了解が成立するためには、大人は通常の対人認知より、より多く感情(イメージ)にたよらざるをえないという事情がある。大人と子どもの関係においては、われわれの対人行動はより無意識的で感情的なものになると考えられる。このようなイメージを利用する方法としてロールシャツハ・テスト (以下ロ・テストと略す) は具体的手段たりうる⁸⁾⁹⁾。筆者⁸⁾⁹⁾は先にロ・テストを使って母子間の相互理解を促進させ、治療に役立てるという試みを報告した。現在様々な症例

においてこの試みを深化させているが、本稿ではある夜尿症の男児にこの方法を適用した症例を詳細に報告したい。

本報告でも、まず①子どもにロ・テストを施行し、つづいて、②別場面で母にロ・テストを施行する。さらに③日を改めて母に子どものロ・テスト反応を推測してもらおうという3つの手順にしたかった。さらに③を細かく3つの段階に分けた。i)何もヒントを与えずに自由に推測してもらう段階、ii)反応内容(何をみたか)のみ教えてそれを説明してもらう段階、iii)反応内容の領域、内容の細かい説明をして、それが理解できるかどうかをみる段階。i)→iii)に進むにつれて、母の推測能力が低いことを意味する。

以上の手続のみではテストの域をでていないが、さらにこの手続の後、反応内容について自由に討論することで、母の子どもに対する認識をイメージの側面から深めてもらうことに役立てた。

シャハテル (Schachtel)¹⁰⁾は「ロ・テスト状況での被験者の体験や反応はあくまでも対人的行為であり、対人的体験である」として、ロ・テスト状況が対人的状況であることを強調しているが、本症例の大枠としてもこのような状況がおこっていることを強調しておきたい。母子が直接同席してロールシャツハ・カードに反応し、お互いに反応しているわけではないにしても、検査者であると同時に治療者でもある筆者を媒介にして、また、ロールシャツハ・カードという同一の刺激を媒介物として母子相互のある種の反応がおこり、それによって日常生活での母子相互作用に影響があったと考えられる。

I 症 例

症例：S・A，昭和43年10月8日生れ。10才，小5の男児。

主訴：毎晩夜尿がある。一晩に2，3回漏らすこともある。

診断：心因性夜尿症。

家族構成：父，母，妹（6才），祖母（実際には父のオバであるが父を養子にしたために祖母になる。独身であり会社を経営している。なかなかのやり手であり，この一家のgod mother的な面もある。）

生育歴及び現症歴：生下時体重2,910g，首の座り4ヶ月，お座り6ヶ月，ハイハイ7ヶ月，始歩1才（母親はそれが3歩であることをはっきり憶えていた）。始語は1才前であった。母親は幼児語が嫌いで，ブーブーではなく自動車と教えていたという。離乳は4ヶ月から始め大人と同じものが食べられるようになったのは1才2ヶ月の時であった。2才頃の質問はたくさんあった。2才前からチーと口で教えるようになったのでトイレット・トレーニングを始めた。昼間オムツが取れるようになったのは2才6ヶ月の時であった。（昭和45年4月）。9月に喘息で入院したのでもとに戻ってしまった。（なお喘息は1才～3才ぐらいまで続き，加療していた。現在喘息は消失しているが，風邪をひくと熱よりせきになってしまう。）寒くなるのでしばらくは昼間もオムツをさせ，次の夏から始める事にした（3才6ヶ月）。夏でも30分ぐらいでトイレにいく程の頻尿であり，この傾向は現在でも残っている。オネショについては止った時期がないという。

3才の時から，祖母（実際には父のオバ）と供に住むようになる。この祖母は現在会社を経営しており，なかなかのやり手である。会社経営の前は長年教師をしていた。この頃から祖母の干渉が強くなり，育て方を巡って対立する。祖母はオネショは起こさなければならないという方針であった。母は祖母の家，（祖母の家と母の家は同一敷地内であったが一応分離されていた）その家のお手伝いさんにS・Aが甘やかされるのが嫌でたまらなかった。そのため，早くから自立させようと思ひ，あまり添い寝もしなかった。

S・Aにはこの他にも幼少時から夜泣き，乗り物酔いなどがあり，かなり過敏な体質である。性格的には嫌な事があっても外にださない方である。S・Aに初めて会った時の印象は，自分から積極的に話す方ではないが，質問された事にはこたえるといったところであった。なかなか治療者と目を合わせる事ができず，たえずソワソワしていた。学校は1日たりとも休みたいくないという。友人関係については，身体が弱く，本好きで理屈だけが先走るので嫌われる面をもっており，あまりうまくいっていないということであった。初回面接で母親が語ったところによれば，母親自身神経質なので“つきはなして”育ててきたという。（この行動

の底には早く自立して欲しいという母親自身の願望が横たわっていたと思われる。ちなみに母親自身も中一の頃まで内向的傾向が極度に強かったが、中2の頃自分をいじめる子に思い切って立ち向った事がある。それ以後できるだけ活動的になろうと努めてきた。S・Aは男でもあり、母親としては余計S・Aに早く、強く自立した子になって欲しいという気持ちが強かったのだろう。)

ところで、S・Aの祖母は、会社を始める前は教職員組合の活動家であった。レッド・パーズで職場を追われ、教職を辞さざるを得なかったのだという。この祖母は実際には父のオバであったが、父を自分の養子にし、学費などの面倒も全て見ていた。したがって、父はこの祖母に頭のががらないところも多い。祖母は兎に角やり手であり、実力もある。祖母の意見では、夜尿は起こして治さなければならないということで、母はその意見に従って夜中の2時頃に決って起こしていた。(この時S・Aの目は完全に覚めていなかったとのことなので、ある意味では習慣的な夜尿をつくっていたともいえよう。) このように表面上祖母にしたがっていたが、母の心の中にはいつも不満が鬱積していた。しかし、母はこの祖母の有能さを認めていた。“私は理屈ではいつも祖母に負けてしまう”と母は語っていた。ところで、母が中一の頃、母をいつもいじめていた子は勉強もよくできて自分の周りにいつも取り巻きを集めている女王的存在であったという。母にはこのような有能な女性に対して、特にアンビバレントな感情をいだき勝ちであるように思われる。祖母の意見には従わなければならないし(自分の理屈では勝てないし)、S・Aの夜尿はいっこうに止んでくれないという板ばさみの中に、母親の不安はますます高くなって

いったのではなかろうか?

一方S・Aはこのような状況にあって、母親を2人持っていたようなものである。祖母からは強力な教育方針を押しつけられ、母からは突き離されるという2重の圧力のもとで、ほとんど自分では何も決定できないスポイルされた存在になり下っていた。その上、幼少時から身体が弱く、それも少しずつ改善されてはいたものの、夜尿だけはどうしても改善されない行動として残ってしまった。ところで、母によればS・Aの父も小1頃までかなり夜尿があったという事からみて、S・Aは体質的にも尿機能の自立が遅れ勝ちな側面をもっていただと思われる。このように、S・Aのせいとばかりはいえない夜尿を巡って、祖母と母の確執が強まり、祖母と母の主観的願望とは裏腹の圧力がS・Aに加わった。この結果として、S・Aは自らの意志を奪われ、2人の望む自立とは全く逆の自己を形成させてしまったと考えられる。

治療について

治療は、このような家族内力動を母に意識化させ、整理させることを目指して行われた。しかし、自力では祖母に太刀打ちできないという母を感情的にも、理屈の面でも支持し、不安をいくらかでも解消させていくことが当面の目標になった。治療者は、起こしても本人の目が完全に覚めていないのなら、むしろ夜尿をつくっているようなものであると説明し、起こさない方針で2週間程やってみてはどうかと提案してみた。その結果2回程夜尿のない日があった。母はこの方針を受け入れた。ここで、母は祖母に起こさない意味を説明し、

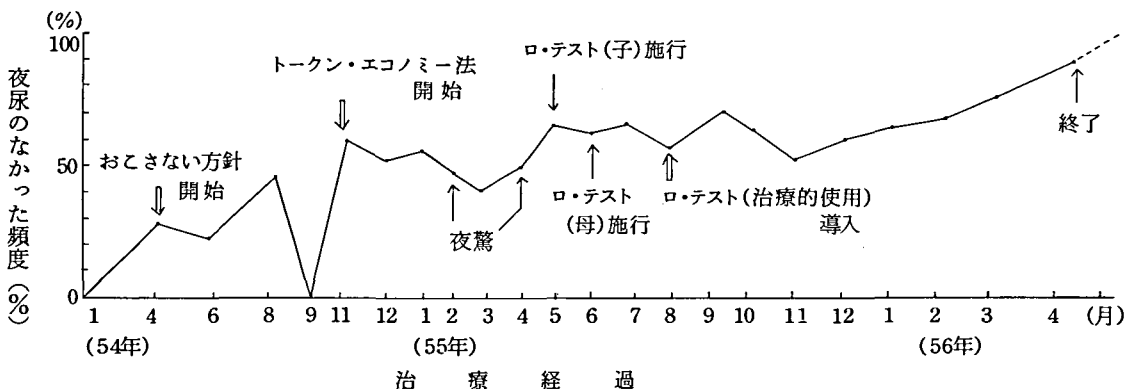


Fig. 2 S・Aの夜尿のなかった割合 (%)

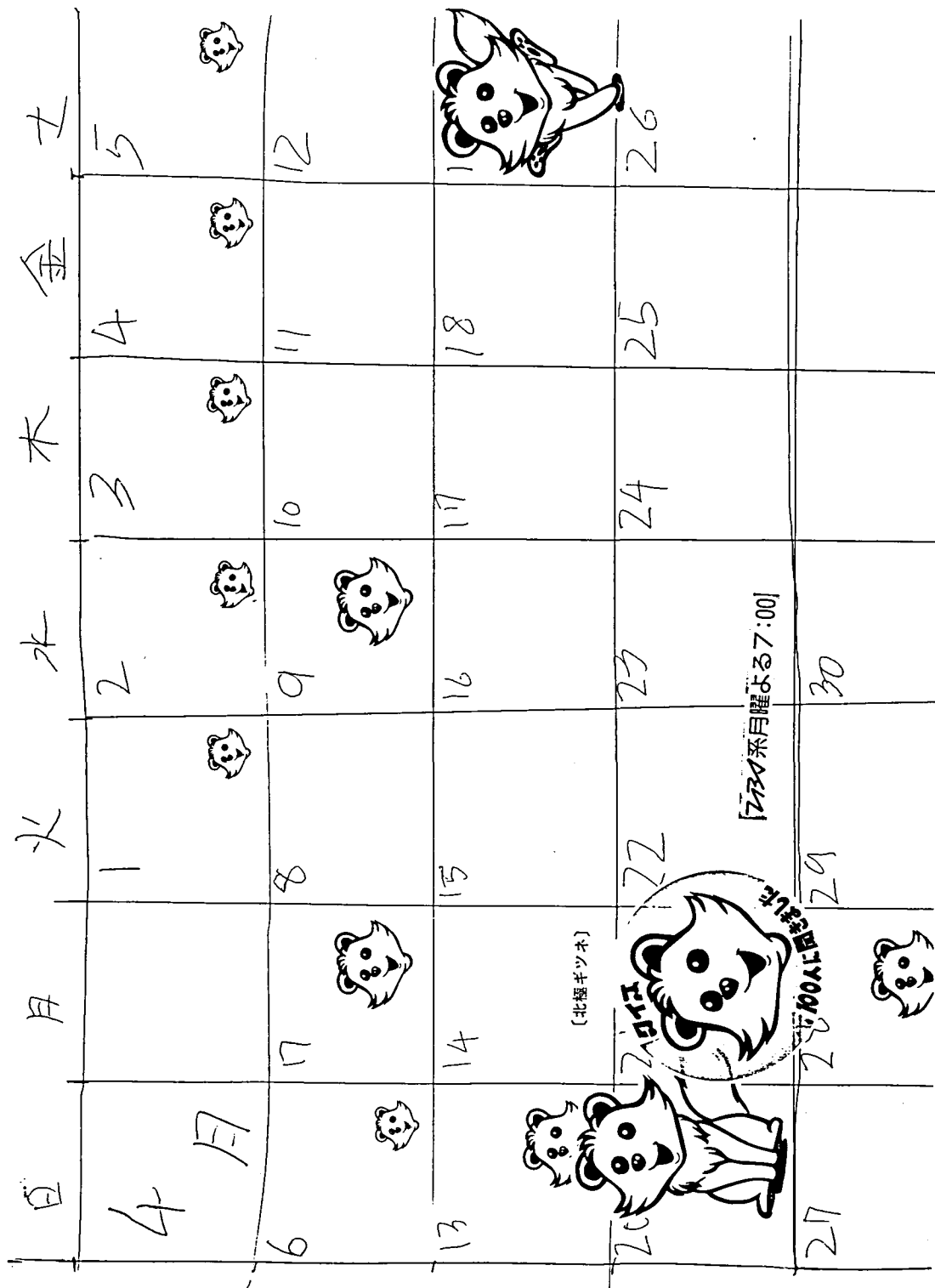


Fig. 3 S・Aが自分でつくったカレンダー
 (初期のもの、シールのはってあるのが夜尿のなかった日、まだ夜尿のある日が多い)

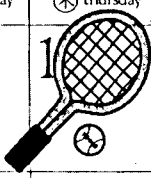
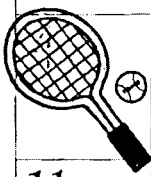
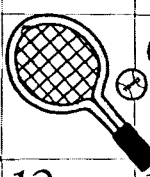








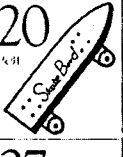
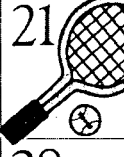
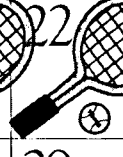
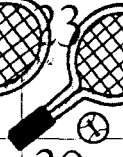






日 sunday	月 monday	火 tuesday	水 wednesday	木 thursday	金 friday	土 saturday
				1 	2	3 <small>夜尿</small>
			7	8 <small>夜尿</small> 	9 	10
11 <small>夜尿</small>	12 	13 	14 <small>夜尿</small>	15 成人の日 	16	17 <small>夜尿</small>
18 	19 	20 	21 	22 	23 	24 
25 	26 <small>夜尿</small>	27 	28 	29 <small>夜尿</small> 	30 	31

Fig. 4 既成のカレンダーに自分の好きなシールを貼ったもの
(後期のもの、夜尿はかなり少なくなっている)

祖母にも協力してもらうことにしたという。治療者はこの過程で方針は呈示しても母に決めさせるという方向をとった。その際、決定した方針については祖母ともよく話し合うよう提案した。その理由は、母に一方な方針を押しつけることで、かえって家庭内の軋轢を増すことを避けたかったからである。母親にはおおよそ1ヶ月1回の割合で来院してもらい、後には2ヶ月に1回の割合とした。

しかし、S・Aの夜尿にはこのような家庭内の力動が色濃く作用しているにしても、そのみでS・Aの夜尿を説明することはできない。S・Aの父にも遅くまで夜尿が残っていたことからみても、S・A自身に排尿の自立が遅れるという傾向が体質的にあることが予想される。S・Aの夜尿は一時自律したのが再発したというものではなく、これまで一度として止ったことがないのである。したがって、夜間の排尿機構がまだ自律していない習慣性のものであると考えられ、この面への治療も必要

であった。この面については行動療法の一技法としてのトークン・エコノミー法 (token economy)¹¹⁾¹²⁾を導入した。具体的には、カレンダーをS・A自身につくってもらい、夜尿のなかった日にはその日のところに自分の好きなシール (token) を貼りつけ、そのシールの数が一定数たまったらS・Aの決めた報酬 (reward) を与えた。この結果治療開始後1ヶ月で夜尿は約半分に減少した。この割合で6ヶ月経過し7ヶ月後には70%夜尿がなくなった。この割合が7ヶ月続き、8ヶ月後に87%の割合で夜尿がなくなったので終了にした。この間のおおよその経過を Fig. 2 に示した。さらに Fig. 3, Fig. 4 にトークン・エコノミー法に使用したカレンダーがしめされている。Fig. 3 は自分で作ったカレンダー、Fig. 4 は既成のカレンダーに自分の好きなシールを貼ったものである。報酬としては、本、デジタル時計、野球のボール、ユニホームなどがその都度選ばれていた。

S・Aについては6ヶ月に1回程の割合で来院し

てもらうのみで、治療は主として母を通じてなされた。①治療前(10才時点)と②治療終了前(12才時点)のPFスタディを比較してみると、①の時点では外罰的傾向が極端に少なく(-22%)、無罰傾向が極端に多かった(+22%)のが、②の時点では、外罰傾向が平均的になり、また無罰傾向もやや高いぐらいに変化している。逆に①の時点で要求固執が平均的であったのが、②の時点では39%(+11%)とかなり高くなっている。反応内容をそのまま比較してみると、全体として表現力が増し、自分の気持ちをうまく説明できるようになっている。例えば①の時点では単に、「うんわかったよ(図版18)」「え、そんな(図版21)」といった単純な反応が、②の時点では「いいよ、他に用があるから(図版18)」「そんな、順番にしてよ(図版21)」といったように表現力を増しているのが分かる。GCRについてみると①73%(+19%)と高すぎたのが、②63%(+5%)とやや高い程度に変化している。PFスタディの各場面を一種の対人場面であるとすれば¹³⁾¹⁴⁾、実際の社会的場面でもいくらかの改善をみせていると思われる。S・Aの変化を生活面からみると、全体として、自分から決める事が増えているという。例えば、中学の受験も、友人の下見についていって自分もうけたくなり、受験勉強を始めたといったように自発的になっていったようである。

II 母子のロールシャツハ反応

Fig. 2 にしめしたように、昭和55年6月から治療場面にロ・テストを導入し、母にS・Aのロ・テスト反応を推測してもらうことを通じて、イメージの側面からS・Aの内面を理解する具体的手段として利用した。その結果、母は自らのS・Aに対する接し方が過干渉になっていたことを理解していった。Fig. 2からも分かるように、このあと夜尿は安定して70%なくなり終了へ向う一契機になったのではないと思われる。

以下、この方法について考察するための原資料として母子のロールシャツハ反応をそのまま記載した。

それぞれのカードについて本人の反応、母親の反応の順に示した。母の反応については〈M〉で

示した。自由反応段階については(Per.) 質疑段階は(Inq.)と略記した。領域はクロッパーら(klopper & Davidson)¹⁵⁾に従い()内に記してある。ロ・テストの施行日時はS・A(昭和55年5月23日)、母(昭和55年6月27日)である。

〔カードI〕

①(Per.) 〆 5" 鳥のように見える(背中合わせの)。(Inq.) 鳥に似ている。こちらとこちら(D₁)で背中計わせ。(どんな鳥?)きつつきのような鳥。こくちばし(d₁)。

W F± A

②(Per.) 〆 カニにも見える。(Inq.) 白いところ(S) 甲羅の模様、ここのところ(d₆) 入らない。はさみ(D₅)、目(d₅)、足(d₇)。48"

W,S F± A

〈M(母親の反応)〉

①(Per.) 15" 3人の忍者みたい。ひとつだけ(D₁) 見るとそうは見えない。こうもりとはちがう、似てはいるが。(Inq.) 色が黒くついているのがそうみえた。真中に一人いて、手(d₃)を挙げている。両方の(D₂)は飛び散って逃げている。なんとなく影だけで動いているってかんじ。148"

W M±,FC',K H,Shadow

〔カードII〕

①(Per.) 〆 40" 見えない……クマのようにも見える。両方合わせると見えない。(Inq.) 目は想像でこころへんにある(D₃の赤いところ)。鼻(d₁)、目、耳、足(d₂, d₃)。(どんなクマ?) 下の赤いところ(D₁)をボールに見たてると玉のりしていることになる。2匹いる。70"

D FM± A P

〈M〉

①(Per.) 〆 〆 55" 人間がしゃがんで手(d₁)をこう合わせている。向き合っている。(なかなか返してくれない。)(Inq.) お祭りの儀式。ゲームみたいなものがあるんじゃないか? 顔の表をあれして……にらめっこしている。笑わせるかなにかそんなゲーム。94"

W M+ H,Festival,Rec

〔カードIII〕

①(Per.) 〆 65" クモである(ない)。クモでないような気もする。(Inq.) クモ、目(D₁)、口(D₉)、足(D₅)、そういったかんじだけで決めてしまった。

dr F ± A

〈M〉

①(Per.) ⊙ ∧ 45" 子どもがダンスしているようにも見える。(このあたりから、遠くから眺めてみたりしてかなり批判的) (Inq.) 野原 (d₀+S) みたいにみえて、これ (D₁) チョウチョが飛んでいて、手を繋ぎそうなかんじ。ここ原っぱ (d₀) もっとこっち (S) にもあって欲しいけどないので説明がしにくい。

W, S M ±, FM H, A, Na P

②(Per.) ∨ ゴリラみたい。(Inq.) 額 (D₀), 目 (D₁), 手 (D₂), 口 (D₃の上のS), 黒いところからそう見えた。手を挙げている。赤い (D₂) は入らない。150"

W FM ±, FC' A P

〔カードIV〕

①(Per.) ∧ 10" 木っていうかんじ。(Inq.) これ幹 (D₁), これははっぱ, 全部で。繁っているってかんじ。

W Fc ± Pl

②(Per.) ∧ 下から見あげた人みたい。(Inq.) ここ (D₁) は取り除いて。(もう少し説明して。) 顔 (d₂), 手 (d₁), 足 (D₃), 小さいものから大きいものを見上げたようなかんじ。40"

W FK ± H

〈M〉

①(Per.) ⊙ ∧ 105" ジャックと豆の木の巨人。(Inq.) 真中 (D₁) が木で、バーッと上から滑り降りてきたかんじ。115"

W M +, FK (H), Pl

〔カードV〕

①(Per.) ∧ 6" コウモリ。(Inq.) 飛んでるコウモリ! ここ顔 (d₃), 羽 (D₁), 足 (d₁), テレビで見たことある。35"

W FM ± A P

〈M〉

①(Per.) ⊙ ∧ 30" (顔をくっつけたり遠ざけたり) これはチョウチョです! 黒アゲハに見えます。(Inq.) これ (d₁) ツノ。これはとまっている。黒いからでしょう! 色が奇麗だからカラスアゲハが好きなんです。

W FC' ± A P

②(Per.) ∧ バレーの悪魔の形。(Inq.) ツノ (d₃),

目 (dd), マント (エリ) (D₁)。口はみつからない。手の下についているビラビラ, 両方聞いているから……踊っている。そうですね。190"

W M ±, mF (H), Cg P

〔カードVI〕

①(Per.) ∧ 10" 宇宙船。(Inq.) ここ胴で (D) (D₃), 先っぽの方が司令船のようなもの (d₁)! (どんな?) ……

D F ± Tr

②(Per.) ∧ ヒトデ。(Inq.) ここ (D₂) をなくして、ここ(でっばりの4つの領域(d₂)全部。(表?裏?) このスジ (D₁) を口に見たててやっぱり裏っかわ! 45"

D Fc ± A

〈M〉

①(Per.) ⊙ ∧ 25" 沼から鳥が飛び立っていくように見える。(Inq.) 下 (D₁) が沼で、濁して飛んでいった。(沼?) 飛び立つときスッと上に立たないで、水面を滑っていく。(鳥は?) ヒゲは問題。ヒゲ (dd) はぬいてここまで入る。水面は濁っている。80"

W FM +, c, K A, Na, Water

〔カードVII〕

①(Per.) ∧ 16" 玉乗りをしている犬ってかんじ。(Inq.) これ (D₁) をボールに見立てる。2つ。これ (d₂) 耳で、ここしっぽ。ここ (D₃) 顔で、あとはべつに! (どんな犬?) 芸をしている犬。35"

W FM ± A, Obj

〈M〉

①(Per.) ⊙ ∧ 70" 子どもが後を振り返っている。両側から。(Inq.) 石 (D₁) の上に腰掛けている。顔 (D₃) だけ後を振り向いていて。上 (d₂) は髪の毛。130"

W M ± H, Na

〔カードVIII〕

①(Per.) ⊙ ∧ 30" 木に登ったトカゲ (D₁)。(Inq.) これ (D₃) を木に見立てて。ここ (D₁) トカゲで登っている。これ足, これ顔, これしっぽ。50"

D FM ± A, Pl P

<additional>

① ∧ 上 (D₃) が宇宙船で下 (D₁+D₂) が噴煙。(どんなの?) 飛び立とうとしている。地上から少し離れている。

dr Fm 7, m Tr, Cl

〈 M 〉

① (Per.) ⊙ ∧ 15" 熊 (D₁) が岩 (W-D₁) を登っている。(Inq.) 岩の上を登っている熊。目、耳があって、優しそうな熊。110"

W FM± A, Na P

〔カードIX〕

① (Per.) ∧ 5" 竜。(Inq.) ここのところ (D₂) で完全に決めた。(言わなかったんだけど) 火を吐いている (d₃)。胴体としてはこれ (D₁)。途中でカットするとしたらこれ (D₁)。ここまで。

D FM±, m (A), Fire

② (Per.) ∧ ドーム (D₁+D₂) の中から発射するロケット。(Inq.) まだ発射する前で、まだ開き切っていないロケット。75"

W Fm 7 Tr, Obj

〈 M 〉

① (Per.) ⊙ ∧ 100" 噴水 (D₃) が噴き上げているってうかんじ。突然でできたのでびっくりして逃げた。(Inq.) ある日突然泉が湧いた。この下が噴水のもと。この辺 (D₁) に中間層があって、ある日噴きあげてびっくりした。上にいるのは人間 (D₂)。びっくりした。三角のお(え)ぼしを被っているように見える。鼻が高い。手 (d₃)。120"

W m Water, H, Na, Cg

〔カードX〕

① (Per.) ∧ 25" 昆虫の集団 ①黄金虫 (D₃)。(Inq.) 木 (D₁) に登ろうとしている。②のクモが飛びかかろうとしているので逃げている。

D FM± A, PI P

② (Per.) ∧ ②クモ (D₁)。(Inq.) ①の黄金虫に飛びかかろうとして糸 (D₁₃) をはいている。56"

D FM± A, Yarn P

<additional>

① ∧ 地上をウロウロしているのはこれ (D₆)。他の虫にはまったく関係なく歩いている。エサ(黄色の領域=D₁₃) をせっせと運んでいる。

D FM± A

〈 M 〉

① (Per.) ∧ 40" 昆虫。虫がたくさんって感じに見えます。その虫をくぐって人間 (D₃) が2人逃げている。背中を向けて逃げている。(Inq.) ピンクのところ人間。(駆けている。) くぐりぬけている。上

(D₁₆) に何かあるんで背中を丸めて逃げている。頭、手、尻、踵。あとは虫。

② (Per.) ⊙ ∨ 花の芯のように見える (D₁₆)。(Inq.) 下に芯 (D₃) があって、上が花ビラ (D₁₇-D₁₈)。

W F± PI

③ (Per.) ∧ ピンク (D₁₉) のが女の子に見える。(Inq.) ピンクのところ、髪の毛があって、手、胸、首のところ、せんがくびれている。180"

D F 7 H

なお most liked card として S・A は V カード (簡単だったからいい) を、母は VII カード (可愛いらしいから) を選び、most disliked card として S・A は III カード (やりにくかった) を、母は I カードをそれぞれ選んでいる。また S・A は父親カードに V カード (感じが似ている)、母親カードに IV カード (下から見上げているという感じだから) を、妹カードとして VII カード (可愛いって感じじゃなくて、こんな感じ) を選んだ。最後に S・A は自己カードとして IX カード (SF っていうのかな、これ地震みたいだ) を選んだ。ちなみに母は S・A (子) カードとして II カードを選び、その理由として「イタズラしそうだから」と答えている。これらのことから分かることは①普通父親カードとして選ばれる傾向のある¹⁶⁾IV カードが母親カードとして選ばれ、しかもその理由として「下から見上げているかんじ」と母に対するイメージが述べられていることである。このことから、母親は S・A にとって父親的イメージを持つ、グレート・マザー¹⁷⁾的なものとして見られているということが理解できる。さらに、② S・A のことを母親は「イタズラしそうな」という危なっかしいイメージでみている。このように、カードのイメージからも、症例のところで検討した S・A と母の相互作用が確かめられた。つまり、母は S・A に対して「イタズラしそうだ」と思うが故に保護的・過干渉になり、それが、S・A からみれば「下から見上げ」ざるを得ないような威圧的なイメージに映ってしまうのである。(祖母のイメージを持つカードはどれかについて質問しなかったのは失敗であった。) その結果、③ S・A は自己カード (self card) として選んだ IX カードのような SF の世界を楽しみ、そこに避難してしまったものと思われる。ちなみに、IX カードは最も S・A が自由に反応できたカードのように思われる。竜が火を吐き(攻撃し)、また、

S・Aの自立への希求と葛藤を象徴するかのよう
に、ドームの中からロケットが発射(自立)しよ
うとしているが、その葛藤ゆえにまだドームは開
き切っていないのだという。(同じIXカードに母は
water 反応をだしているが、これも母が竜の火を
水で消そうとしているようで大変興味深い。ちな
みに竜はS・Aの名前に関連があった。)

III 母子それぞれのロ・テストからみた 母子差と母子相互作用

Aサイコグラムからみた母子差

Fig. 5に母子のサイコグラムを示した。Fig. 5
から分かることは、①内向的であるという点では
母子共通しているが、母はM=7であり超内向型
であるということ、したがって見かけ上母親がそ
れ程内向的に見えないということから、かなり意
識的に努力して内向性をカバーしているのではな
いかということが推測される。ちなみに、母は中
1の頃、この傾向を意識的に克服した経験がある。
それ故、同じ傾向をもつS・Aに対して母がより強
く自立を求めるのは当然の成りゆきであると思わ
れる。次に、②MとFMの数に関して母子で逆転
した関係にあるということがある。母のMは7個
(S・Aは1個) S・AのFMは7個(母は3個)であ
る。小沢¹⁸⁾はMとFMの発達の意味について次
のようにのべている。

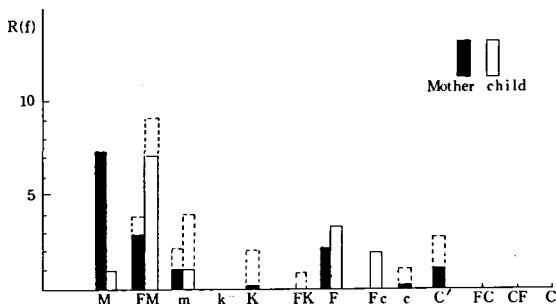


Fig. 5 母子のサイコグラム

……われわれは運動反応の発達の変遷を、単にFMに次
いでMが出現するというようにだけ考えることはできな
い。むしろわれわれは、それを「未分化な運動反応から分
化したそれへ」と呼ぶ方がふさわしいように思われる……

このような観点からすれば、S・AのFMは成人
したら母のもつMへと変化する可能性をもつも
のであるといえよう。しかしながら、現時点では
この成熟差には歴然としたものがあり、当然母か

らS・Aへの過干渉はS・Aに対してこの能力差を自
覚させ、S・Aの自立を妨げる要因となりうるもの
である。(治療的観点からすれば多少事情は異なる。Mの
多さは母の共感性の高さという意味で、①母への心理療法
の有効性を根拠づけるものであり、②S・A自身について
いえば、FMがMに変化し、S・A自身心理的に成
熟した能力を充分に発揮させる可能性をもってい
ると考えられるからである。)

さらに、③mについてみると(additionalも含め
て)S・Aの方がかなり多い。mを心的葛藤の指標
とみるならば¹⁵⁾、S・Aの葛藤は母よりかなり高い
といえよう。(しかし、カードIXの飛びださんとするロ
ケットのイメージが象徴するようにこれは自立への希求を
含む葛藤であると考えてよいように思う。)

B量的比率からみた母子差

Table1に母子の量的比率をしめした。()内が
S・Aのものである。いくつかの特徴をひろってみ
ると次のようになる。まず、①色彩カード、無色彩
カードを問わず母の初発反応時間はS・Aに比して
極めて遅い。これは母がカードを頻繁に回転させ
ているためである。最初の反応がでるまでに時間
がかかるのは能力がないためではなく、批判的な
傾向を持っているためである。「～がないので説明
しにくい」「～にしてはちょっと」といった反応が
多かった。このような批判的な見方は、また適確
であるだけに、批判を受けるS・Aにとってみれば
圧力となりうるものであろう。次に②W:M比
についてみると、母子いずれもWが多いが、母は
大体2:1の比率になっており、「知的業績に対す
る欲求を満たすに足る創造的な潜在力がある」¹⁵⁾
と見なされるが、S・Aにおける7:1(W>2M)
は要求水準の高さをしめしていると考えられる。
S・Aの中にこのような要求水準の高さが認められ
るとするならば、母の能力を(あるいは祖母の能力の高
さを)みせつけられることはS・Aにとってさらにス
トレスフルな体験になってしまうと思われる。(ち
なみに母のW%の高さは、よりよく統合されたもの(M=7)
であり、母の統合能力の高さを示している。)さらに
③S・AにおけるA%の高さ(73%)は同一年令の子
どもの平均(11才=50.4~54.9%)¹⁸⁾に比べても高く、
S・Aの成熟の遅れをしめしているように思われ
る。

以上A、Bにおいて母子差についてのみ触れて

Table 1 母子のスコアのまとめ

Summary Scoring Table

R (total response)	14 (15)	W : D	13 : 1 (7 : 7)	FC+CF+C : Fc+c+C'	0 : 3 (0 : 2)	
Rej(Rej/Fail)	0 (0)	W %	93 (47)	FM : M	3.5 : 7 (8 : 1)	
TT (total time)	1216'' (539'')	D d %	7 (7)	F% / ΣF%	14/93 (20/100)	
RT (Av.)	94'' (36'')	S %	0 (0)	F+%/ΣF+%/R+%	50/85/79 (67/87/87)	
R ₁ T (Av.)	50.0 (21.2)	W : M	13 : 7 (7 : 1)	A %	36 (73)	
R ₁ T (Av. N.C.)	49.0 (9.4)	E. B	ΣC : M	0 : 7 (0 : 1)	A t %	0 (0)
R ₁ T (Av. C.C.)	51.0 (33.0)		FC+c+C' : FM+m	3 : 5 (2 : 8)	P (%)	5(36%) (5(33%))
Most Delayed Card & Time	IV 105'' III 65''		V III + IX + X / R	36% (33%)	Content Range	3 (4)
Most Disliked Card	I (III)	FC : CF + C	0 : 0 (0 : 0)	Determinant Range	5 (5)	

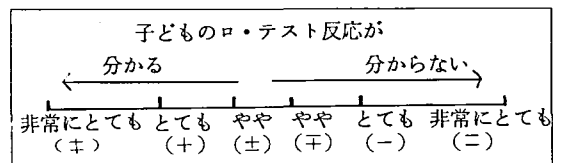
上段母 下段()内子

きたが、その他の面では母子は似かよった面が多く、全体としてみれば共通点の方が多いといつてよいかもしれない。特に双方が内向的であり、外界の刺激よりも自らの内面に頼って行動するタイプであるという点では最も大きく似通っているといえる。しかし、この点は母親自身が語ってくれたように、母が嫌う性格傾向であるために、より一層S・Aの姿は母自身の中の批判されるべき自己像(影⁹⁾の部分)として、S・Aに対する母の批判的な見方を増幅させてしまっている。ここにこそこの2人の母子関係の悲劇があったといわなければならない。

IV ロ・テストの治療への適用

これまで母子の反応そのものと、その差についてみてきた。しかし、母子のロ・テストの差をみるだけでは、確かに母子をそれぞれ別個の存在として独立させた上で、個人としてのロ・テストをみた場合よりは幾分進歩しているとはいえ、母子の相互作用の側面にまで立ち入る視点を得てはいない。母子の相互作用について考察するためにはいま一步、歩を進め、子どもの(または母の)イメージ世界を母(または子ども)がどう見ているかというところまでいかなければならない。そのような視点を持って初めてイメージの側面からみた母子の相互作用が見えてくると思われる。

筆者は、母親が本人をどれくらい理解しているかをみるために、子どものロ・テスト反応を推測してもらった。推測にいくつかの段階をもうけた。①何もヒントを与えずに自由に推測してもらう段階、②反応内容(何を見たか)のみ教えてそれを説明してもらう段階、③反応内容の領域、内容の細かい説明をしてそれが理解できるかどうかをみる段階。①→③に進むにつれて、母の推測能力が低いことを意味している。結果を、分かる(+)と分からない(-)に大別し、それぞれをまた3段階に分けて評定した。全体で6段階の評価になる。



結果は+(+, +, ±)に評定されたものが、①段階3個(3/17)、②段階7個(6/17)、③段階4個(4/17)、-(干, -, 二)に分類されるものが3個(3/17)残った(Table 2)。この、どうしてもそうはみえないという3個はカードIの“きつつき”(きつつきにはどうしてもみえない)、VIIカードの“玉”(母は石とみた。玉という反応については批判的)、VIIIカードの“トカゲ”(これをトカゲと見ると丸味が足りないと思う)であった。

この手続全体について以下詳述したいと思う。母親には前回に主旨を伝えておいたが、非常に

緊張気味であった。手続全体から受けた印象は、①S・Aと同じものを割合見る事はできるが批判的である。②また、本人においては未分化なものが母においてはより統合された形で見られていた。この点母の能力は高いと思われ、この能力で批判的にS・Aの世界をみている等であった。それぞれのカードについては次のようであった。

〔カードI〕

"きつつき"については、どうしてもそうは見えないんじゃないかと批判的で、首をかしげている(③段階目で-)。決してそうは見えないという態度であった。"カニ"は③段階目でなんとか見ることができた(③段階目で±)。

〔カードII〕

"熊"を見ることはできるが、熊とすると胴が短かすぎるのではないかと批判的であった(②段階目で±, ③段階目で+)。

〔カードIII〕

母自身の反応と照らし合わせつつみている。正面からみた"クモ"というのが分かりにくいという。

〔カードIV〕

"木" "人"ともに①段階目で見ることができた(①段階目で±)。しかし、母親においてはジャックと豆の木というよう統合された形でイメージされていることが特徴である。木は見にくい。見上げた人というのはスムーズに分かったという。

〔カードV〕

②段階目で見ることができた。

〔カードVI〕

"宇宙船"という子どもっぽい見方には不賛成、批判する(②段階目で-)。"だって、宇宙船にヒゲがあるのはおかしいですね"と自分で自分の反応を確かめるようにいう。"ヒトデ"は②段階目で可(②段階目で±)。

〔カードVII〕

"玉"について批判的(母は石と見ている)(③段階目で-)。確かに玉よりは石の方が正確である。犬については全体のバランスが悪いという。

〔カードVIII〕

これを"トカゲ"だと見ると、丸味が足りないのではないか?一応納得はできるのだが、どうしても合点がいかないという感じで、首をかしげながらカードを見ている(③段階目で-)。<addition-

al>の"宇宙船"については①段階目で+。自分の反応と似た反応(D₁の領域を母は"熊" S・Aは"トカゲ"と見ている)についてとくに批判的になるようである。

〔カードIX〕

"竜"は③段階目で+。"ロケット"についてはより分かり易かった(②段階目で+)。"まだ開き切っていない"といったところがよく分かるとのこと。

〔カードX〕

母は昆虫をいっぱい見えていたので、割合見易いようだった。"クモ"については特によく見えた(④段階目で+)。

この手続きのあと母親に感想を求めたところ、実際の結果は割合よいにも拘らず、"なかなか見えないですね!"との事であった。また、母の高い統合能力でS・Aに対して批判的な面が強すぎるのではないかという指摘には合点がいったようであった。

この手続きのあと、ロ・テストのイメージについて何回か自由に話し合った。このような試みを通じて、母親は自らのS・Aに対する、過度に批判的で過干渉な態度について、イメージのレベルで具体的に理解したように思われる。S・A自身の夜尿もこの頃から約半分ないという段階から2/3ないという段階へと改善されていったところからみて、このような試みも一定の効果をもっていたのではないかと考えられる。

V ロ・テストの反応内容からみた 母子相互作用

ロ・テストからそれぞれの母子差と母子関係について類推することはIVでのべたような手続を経なくても可能ではある。しかし、このような手続を経た後では母子関係がより具体的に生き生きと理解できるようになる。本稿の試みでは相互作用といっても、①母→子(母が子をどうイメージしているか)の方向のみであり、②子→母(子が母をどうイメージしているか)への作用は明確にはなっていない。(母親カードを選ばせるという試みの中にその一端は認められるにしても、それだけでは未だ不十分である。)この方向の作用をも明確にするためにはS・Aが母の反応をどこまで推測できるかという反対方向からの手続も必要となるのであるが、本症例では行なっ

いない²⁰⁾。

ここでは①の方向について得られたロ・テストの反応内容からみた母子相互作用をA母親の批判的・過干渉的態度の反映、B母親の統合的態度の反映、C S・Aの反応への母親の潜在的な理解力の反映に分けてのべたい。

Table 2 母親→子の反応推測

card	No	free response	suggestion	explanation
I	①	--	-	-
	②			±
II	①		±	+
III	①		干	±
IV	①	±	±	
	②	±	+	
V	①		+	
VI	①		干	
	②		±	
VII	①			干
VIII	①			干
	add		+	
IX	①			+
	②		+	
X	①		+	
	②	+		
	add		+	

A 母親の批判的・過干渉的態度の反映

カードIIについて、S・Aははじめ「見えない」と答えた後で自信なげに「熊のようにも見える」と答えている。このS・Aの反応に対して母は「熊にしては胴が短かすぎる」という批判的な反応をしている。カードVIの「宇宙船」という反応に対しては、「宇宙船にヒゲがあるのはおかしい」とかなり細かい部分にまで批判的である。またカードVIIの「玉」という反応に対しても「玉ではおかしい」と批判的である。この反応に関していえば確かにD₁の領域は石のように角張っており、石とみる方が現実的な大人の反応であるように思われる。しかし、このカードVIIが一般に「母親カード

といわれ、女性的な印象を与える」カードであり、「やさしく、軽快なカード」¹⁶⁾であることを考慮に入れるならば多少事情は異なってくる。ここではむしろ未成熟なS・Aの玉という反応をも許容してあげられる母性的能力が必要とされるのではないだろうか。さらに、S・Aがこのカードを玉のりしている犬という極めて不安定なものとしてみていることに注目するならば、なおさらそのような不安定さを受容できる母親(大人)の側の成熟が要求されているように思われるのである。

さらにVIIIカードについて、S・Aの「トカゲ」という反応について「丸味が足りない」という意見を母親はよせている。この見方について母とS・AがD₁という同じ領域に対して同じような反応をしたということが注目される。母はD₁を「熊」と見、S・Aは「トカゲ」とみている。どちらがより現実的な反応であるか、にわかに判断はできないが、同様の事が日常生活の場面で起った場合、母の批判的な見方が通ってしまうことは想像に難くない。S・Aの性格が母に似ていることに関して母は批判的であり、突き離して育てたという臨床的事実を考慮するならば、このことは単にどちらの見方が現実的であるかという以上の問題を孕んでくるように思う。日常場面において、母がS・Aを自分に似ているとイメージしたとき、それは母にとってよりアンビバレントな場面となり、より葛藤に満ちた過剰な反応の起こることが予想されるからである。

以上のカードに反映された事実は、恐らく日常場面での母のS・Aに対する批判的で、過干渉な態度の反映されたものと見なすことができるように思われる。ただここでもう一度強調しておかなければならないことは、その原因はともあれ、S・Aの現実には誰がみても頼りない側面を持っていることも事実だということである。この事実を抜きにして、いたずらに母の態度を責めることは、単に間違いであるという以上に、臨床的には治療のネックになってしまうということは、特にわれわれが念頭に置いておかなければならぬことである。この事実の重さを抜かしてしまうと母親は治療者の意見を受け入れず、あらずもがなの抵抗に出会ってしまうと思われる。この事実を強調するところにまた母子の相互作用を重視する臨床的意

義もあると思う⁷⁾。

B 母親の統合的態度の反映

カードIVはS・Aにおいて“木”と“下から見上げた大人”という2つの部分としてみられているのに対し、母親においては“ジャックと豆の木の巨人、真中が木で、パーッと上から滑り降りてきた感じ”と、丁度、S・Aの木と人を見事に統合した形になっており形態水準も高い(Fig.6)。さらに、カードVIではS・Aが“宇宙船”と“ヒトデ”とみた領域が、母親においては“沼を飛びたっていく鳥”という、より統合された形でとらえられている(Fig.7)。筆者はこの2つのカードにおける母の反応に直面した時、その母子の能力差に一種の感銘をうけてしまった。このようによくできた

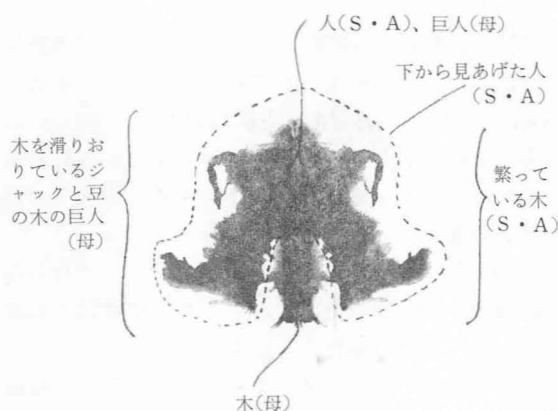


Fig. 6 カードIVの母子反応領域

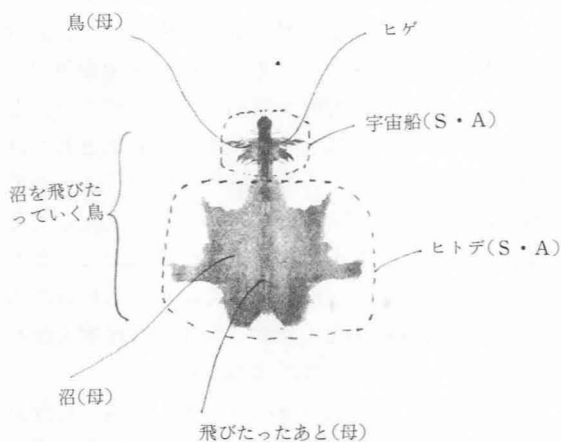


Fig. 7 カードVIの母子の反応領域

反応で見られてしまっは、S・Aが自立心のない子どもになってしまうのはむしろ当然のこのようにすら思われた。とりわけ、カードVIにおいてはS・Aの“宇宙船”という見方が批判されたが、確かにこれを宇宙船とするには、S・Aがヒゲとみた部分が余計である。

このように既にできあがり(統合された)もの見方で、葛藤に満ちたS・Aの反応を吸いとりてしまうような反応の仕方が、現実の母子関係でも見られた。ヴァン・デン・ベルク(J.H.van den Berg)²¹⁾は親の態度に両極性(アンビバレンス)がある場合、「子どものパーソナリティは吸いとられてしまう(傍点引用者)」とのべているが、本症例の母親にもS・Aに対して、多分にアンビバレントな態度が根底に認められた。このようなアンビバレントな態度を根底にもっており、かつ、母の能力がイメージの統合力という点においてさえこのように優れているのだから、逆の場合には利点にもなりえた“統合力の高さ”が、S・Aにとって余計に自らの無力さを感じさせる欠点へと転換されていったのではないと思われる。

C S・Aの反応への母親の潜在的な理解力の反映

ところで、今まで母のS・Aへの理解力に対して否定的な面ばかりのべてきたが、それは問題点を浮き彫りにするためにしたことであって、全体としてみれば決してそうではない。S・Aの反応に対する理解にしても、17個の反応のうちどうしても見えないというものは3個のみであった。さらに個々のカードの特徴をみると、例えばS・Aが最も自由に反応しているIXカードにおいて、S・Aの“火を吐いている”という攻撃的な“竜”ですら(治療者が説明すると)よく理解できるとしている。この“火を吐く竜”という攻撃性に対して、母は“噴きあげる水”という反応をしているが、これは①S・Aの攻撃性を水で消そうとしているという面と、②“突然水が噴きあげてびっくりした”というようにS・Aの夜尿の底に何らかの問題が潜んでいることを感じ始めているという2面があることが推測される。このことはXカードの“クモ”についても同様である。母はS・Aの“クモ”を“特によく見えた”と評しているが、このクモは黄金虫を襲おうとして糸を吐いているクモであること

を考えると非常に興味深い。クモがグレート・マザーの象徴であると考えられるならば²²⁾、このクモ→黄金虫という関連は、母のS・Aに対する過干渉を象徴しているとも考えられる。このように、母親は①S・Aがその内に攻撃性を抑圧させていること、②それに対して自分が干渉しているという側面に気づき始めているのではないかと考えられるのである。

さらに、治療的にみるならばもっと重要な反応がある。それはカードIXの“まだ開き切っていないドームの中から発射するロケット”という反応である。これは自立へと向おうとするS・Aの欲求を象徴していると思われるが、この反応に対して母親は“より分かり易かった。まだ開ききっていないといったところ特によく分かる”とのべていることが注目される。さらに、カードVIIIの <additional>の、したがって最も終りの反応のひとつである“地上から少し離れて飛び立とうとしている宇宙船”という反応に対しても母は“よく分かる”と評価している。この事実から、治療のこの時点においては、S・Aの夜尿が次第に改善されつつあることを自覚し、またS・Aが自立しようとしているという事実に気づき始めているのではないかと推測される。このような相互作用が現れ始めているということは治療的観点からすればとりわけ重要なことであるように思われる。

おわりに

ロ・テストから見た母子の相互作用についてこれまでに詳しく述べたので、最後に治療全体の中でロ・テストが果たした役割についてふれておきたい。

ロ・テストをこのような形で本症例に導入した目的は、①母親にS・A自身のものの見方をイメージのレベルで理解してもらうこと、②母親のS・Aに対する批判的・過干渉な態度を具体的なイメージのレベルで感得してもらうことであった。ロ・テストの治療的導入以前にも、母親がS・Aに対して過干渉であり、批判的であることは言語的レベルでは何回も話し合われていた。しかし、一般的な指摘ではなかなか理解が深まらず、具体的な実感レベルでの理解の手段が欲しいといった

時期であった。

Fig.2からみてとれるように、トークン・エコーミー法の開始以後夜尿は既に約半分に減少していた。しかし、そのレベルが長く続きそれ以上の進展がなかなか得られなかった。筆者はこの治療の初期の頃、この症例に対しては母親に対する一般的な支持療法とS・A自身へのトークン・エコーミー法でかなりの改善がみられると思っていた。しかし、予想したような進展がみられないのは、母親が治療者との話し合いの中で得た理解を感情的な実感のレベルでは理解していない。いいかえるなら具体的なイメージのレベルの次元で理解できていないのではないかと考えた訳である。それまでの面接の中で、母子ともにイメージの能力には普通以上のものがあると分かっていたので、具体的にロ・テストのイメージを利用してみようと考えた。

Fig.2からみる限り、この試みには一定の効果があったと思われる。ひるがえって面接の場面でも、この頃から自発的にS・Aに対して、“少しいい過ぎているかもしれない”という発言がみられるようになった。また、S・Aに対する肯定面への言及が増加したように思われる。

S・Aも、中学を受験したいということで自ら塾に通うようになった。このような自発性はこれまでに見られなかったことであるという。

ところで、ロ・テストをこのような形で治療場面に導入した意義として、治療者自身予想していなかったのは、先にのべた①②の効果の他に、③母子の相互作用を治療者自身が深く理解できるようになったということである。治療者は、いわば母とS・Aのイメージの次元での相互作用を現場で目撃したような臨場感を味わうことができた。しかもそのプロセスはロ・テストへの反応として詳細に書き留められていたために、母にS・Aへの態度を説明する際、非常に具体的な例を生起したままに呈示することができたわけである。このようなプロセスの中で、母親はS・Aに対する理解のみならず、自らのS・Aに対する態度への理解も深めていくようになったのではなからうか？

ロ・テストの治療的使用のあと、母親は自分自身の幼なかつた頃の事を思い出し、自分も内向的であり、それを意識して克服してきた事実を目を

向けるようになった。さらに、そのような自分の態度が現在も祖母との葛藤の中に繰り返されており、その不安がさらにS・Aの自立を過度に希求し、結果としてS・Aをスポイルさせてしまう原因を自ら生みだしてしまっていることなどに気づいていった。勿論そのことに気づいたからといって家族内のダイナミクスが変わるわけではないが、S・Aの自立にともなって少しずつ改善されていくのではないかと思う。

要 約

頑固な夜尿症をもつ10才男児の治療にロ・テストを治療的に導入した一症例について報告した。ロ・テストを母子それぞれに施行し、さらに子どもの反応を母に推測してもらうことを通じて、母親の子どもに対するイメージレベルでの理解を深めることを目指した。その結果、母親の子ども自身に対する理解のみならず、母親の子どもへの様々な態度の具体的な理解も深められた。治療はこの方法の導入を契機にしていくつかの進展をみせた。

この方法のもう一つの効果として、母子間の相互作用を具体的なイメージのレベルで手にとるよう理解できるということがあげられる。このような理解によって、治療者の母子に対する理解はさらに深められた。一方母親は自らの子どもに対する反応の意味をしり、子ども自身の発達を促進させたと思われる。

謝辞

本症例は昭和56年3月25日、東京都精神医学研究所のロールシャッハ症例研究会で報告された。その際、片口安史先生、岡部祥平先生、川井尚先生、溝口純二先生を始め多くの先生方に御意見、御指導をいただいたことに感謝いたします。また、本症例の公表を許可していただいた東京慈恵会医科大学小児科教授前川喜平先生の日頃の御指導にこの場をかりて深謝いたします。加えて、日本心理学会第45回大会で東京都精神医学研究所の遠山尚孝先生他の先生方に貴重な御意見をいただいたことにもお礼を申し上げます。

引用文献

1) 井原成男：ロールシャッハ・テストからみた母子相互作用

- 用(1). 日本心理学会第45回大会発表論文集, 633, 1981.
- 2) Uexküll, J.: A stroll through the worlds of animals and men. In Schiller, C.H. (Transl. and Ed.) Instinct behavior. Int. Univ. Press, 1957.
- 3) 岡田幸夫：子どもの発達とその病理(村井潤一編：発達とその環境). ミネルバ書房, 1979.
- 4) 藤岡喜愛：イメージと人間. 日本放送出版協会, 1973.
- 5) 水島恵一・屋久孝久：心理療法におけるイメージの意義(催眠シンポジウムII). 誠信書房, 1971.
- 6) 佐々木孝次：母親・父親・掟. せりか書房, 1979.
- 7) 井原成男：発達療法的にアプローチした2症例. 長野大学紀要, Vol.2, No.3・4: 91-105, 1981.
- 8) 井原成男：アノレクシア・ネルボーザ症例におけるロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用. 日本心理学会第43回大会論文集, 652, 1979.
- 9) 井原成男：ロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用. ロールシャッハ研究, Vol. XX III: 145-158, 金子書房, 1981.
- 10) Schachtel, E.G. (空井健三・上芝功博訳)：ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房, 1975.
- 11) 園田順一・高山巖：子どもの臨床行動療法. 川島書店, 1978.
- 12) 井原成男：新刊紹介「Hebert, M.: Behavioral treatment of problem children. Academic Press, 1981」. 小児科診療, Vol.44, No.12: 140-141, 診断と治療社, 1981.
- 13) 井原成男・河野洋二郎：自閉症児のコミュニケーション-WISCとPFTへの反応特徴一. 心理測定ジャーナル, Vol.15, No.11: 11-16, 日本文化科学社, 1979.
- 14) 井原成男・河野洋二郎・庄司順一・帆足英一：PFスタディとWISCへの反応からみた自閉症児のコミュニケーション特性. 小児の精神と神経, Vol. 22, No.1, 国際医書出版, 1982(掲載予定).
- 15) Klopfer, B. & Davidson, H.H. (河合隼雄訳)：ロールシャッハ・テクニク入門. ダイヤモンド社, 1964.
- 16) 片口安史：新・心理診断法. 金子書房, 1974.
- 17) 三木アヤ：女性の心の謎-グレートマザーと日本の母性一. 太陽出版, 1981.
- 18) 小沢牧子：子どものロールシャッハ反応. 日本文化科学社, 1970.
- 19) 河合隼雄：影の現象学. 思索社, 1976.
- 20) 八尋華那雄：コメント. ロールシャッハ研究, Vol. XX III: 157-158, 金子書房, 1981.
- 21) J.H. van den Berg (足立毅・田中一彦訳)：疑わしき母性愛. 川島書店, 1977.
- 22) 秋山さとこ：夢解きのマニュアル(別冊宝島 夢の本). JICC 出版局, 1979.